

島根大学言語教育研究会 研究発表会開催記録（活動記録）Ⅱ —第11～19回—

「島根大学言語教育研究会」は、島根大学教育学部の言語教育（国語教育と英語教育）を研究対象とする教員によって構成される研究組織である。各構成員の所属は、教育学部言語文化教育講座、同初等教育開発講座、教育学部附属中学校、同附属小学校に別れるが、国語科教育学・英語科教育学・国語科内容学・英語科内容学のいずれかを専門とするので、すべてが「言語」「教育」の領域に含まれる。

なお、ほぼ同一の構成員による年度単位の3種の研究プロジェクト「言語コミュニケーション教育の研究と開発」（平成18～22年度）・「言語文化教育の研究と実践」（平成23年度）・「体系的言語教育における広領域型研究と実践」（平成24～26年度）が9年間継続している。これらが短期的・非連続的であるのに対して、本研究会は長期的・継続的な性格をもつ。「プロジェクト」と「研究会」とが連携し相互に補完しつつ、言語文化と言語教育の推進と探究に寄与していると言ってよいであろう。

また、一般性と普遍性をもって総合的な言語教育研究を指向するだけでなく、附属学校所属の研究者を構成員に含むことによって地域や社会の現実に直結する個別の実践的研究も活動の中核に位置づけられる点も本研究会の特色となる。

研究会活動の中心は、年2～4回開催の研究発表会である。これまでに以下のように19回を重ねている（開催回・開催年月日・発表題目・発表者のみを記す）。

- 第1回 平成20年9月29日（月）
教育学部国語専攻生の授業履修動向について—日本文学史Ⅰの授業改善の結果から—：福田景道
- 第2回 平成21年2月10日（火）
生徒・学生にとって必要なコミュニケーション能力とは：大谷みどり
- 第3回 平成21年7月10日（金）
語学から見た「ことばの力」：縄田裕幸
- 第4回 平成21年9月11日（金）
正しく美しい言葉から遠く離れて—『新編新しい国語二』：田中 俊男
- 第5回 平成21年12月11日（金）
新学習指導要領のポイント：初等、中等教育の連携の視点から：猫田英伸
- 第6回 平成22年1月29日（金）
ローマ字教育の現在：富安慎吾
- 第7回 平成22年7月10日（金）
国語の授業と日本語文法：百留康晴
- 第8回 平成22年9月17日（金）
文法意識を高めるインプットを与えることの効果について：高田純子

- 第9回 平成22年10月8日（金）
論文指導と文法教育に関する一考察—現在完了とuntil節に生起する動詞をめぐって—：林高宣
- 第10回 平成22年11月18日（木）
「伝統的な言語文化」と書写教育—書体史研究から見えてくるもの—：福田哲之
- 第11回 平成23年7月8日（金）
ハーンの日本文化論：高瀬彰典
- 第12回 平成23年9月16日（金）
漢文学習考—「漢文学基礎講義」の実践を通して—：竹田健二
- 第13回 平成24年3月23日（金）
言語教育研究と教科内容学—言語文化教育プロジェクトの方向性—：福田 景道
- 第14回 平成24年7月27日（金）
国民教材としての魯迅「故郷」を考える：田中俊男
- 第15回 平成25年2月28日（木）
古文教材『竹取物語』の未来—専門教育科目「日本古典文学教材研究」をめぐって—：福田景道
- 第16回 平成25年3月27日（水）
国語科におけるデジタル教科書の活用：田中耕司
- 第17回 平成25年12月20日（金）
国立台湾師範大学国語教学中心における中国語学習：竹田健二
- 第18回 平成26年1月31日（金）
英詩と死：松本舞
- 第19回 平成26年8月29日（金）
専攻共通科目としての「日本語表現論」：百留康晴
専攻共通科目としての「異文化の交流と理解」：大谷みどり
専攻共通科目としての「日英対照言語学」：縄田裕幸
このうち、第10回までの概要は、本『島根大学教育学部紀要』第44巻別冊「言語コミュニケーション教育の研究と開発」特集号に「島根大学言語教育研究会研究発表会開催記録（活動記録）」として掲載したので、ここには第11回から第19回までの研究発表会の開催記録を収載する。（福田景道）

島根大学言語教育研究会第11～19回研究発表会 記録・概要

- 第11回 平成23年7月8日（金）
会場：島根大学教育学部212研修室
発表題目 ハーンの日本文化論
発表者 高瀬 彰典
司会者 福田 景道

発表概要：14年間にも及ぶ日本体験から、ハーンは日本研究を着実に積み上げた。神道の靈魂偏在や仏教の輪廻転生が矛盾なく同居する、日本独自の神仏混淆の世界の諸相をつぶさに観察し、庶民の素朴な信仰と質素な生活に接することによって、彼自身の人間観や世界観は大きく変化したのである。さらに、スペンサーの社会進化論を援用しながら、ハーンは仏教的な円融や神道的な汎神論を科学的に捉えて理解するようになった。彼の日本に対する精神的探究は、作家・教育者としての求道者の活動の独壇場であった。日本はハーンにとって最適の研究課題を提供し、彼は日本を世界に紹介した功労者として歴史に名を残した。この意味において、日本は彼にとって運命的な出会いであり、彼の才能を開花させる千載一遇の場となった。一心不乱に生涯を賭けて献身した彼の日本研究の著作は、今尚、類書を遙かに凌駕した価値を持ち続けている。ハーン的神道理解はけっして書物からのものではなく、次のような詩人的感性から体全体で把握した想念であった。神々の国の首都である松江での神道体験は、ハーンの本理解の基盤となった。大気に神々しさを感じするハーンの鋭い詩的感性は、文献に頼ることもなく民衆の神道信仰に苦も無く入り込むことができた。「杵築」での次のような描写は、ハーンの本理解の原点を示唆している。

「この大気そのものの中に何かが在る--うっすらと霞む山並みや妖しく青い湖面に降りそそぐ明るく澄んだ光の中に、何か神々しいものが感じられる--これが神道の感覚というものだろうか。」(『神々の国の首都』講談社文庫、1990年、p.140.)

来日後すぐに、神道の発祥地出雲に英語教師として赴任したことは、ハーンの本理解を深める大きな動因となった。1890年9月14日に外国人としては最初に出雲大社の社殿に正式参拝して感銘を受けた人物であった。宮司の儀式や巫女の舞から受けた感動から、彼は神道の本質に触れたような気がした。彼の神道研究は単なる文献的な解明ではなく、日本人の日常的な宗教生活の営みの中に神道の実相を探究するものであった。したがって、単に古事記や日本書紀などの書物に神道の起源を求めたのではなく、庶民の道徳感情や生活様式そのものの中に生きている神道という視点を忘れなかった。さらに、「杵築」の中で、ハーンは庶民に浸透した神道の力強さを次のように述べている。

「仏教には万巻に及ぶ教理と、深遠な哲学と、海のように広大な文学がある。神道には哲学はない。体系的な倫理も、抽象的な教理もない。しかし、そのまさしく「ない」ことによって、西洋の宗教思想の侵略に対抗できた。東洋のいかなる信仰もなし得なかったことである。……現実の神道は書物の中に生きているのではない。儀式や戒律の中でもない。あくまで国民の心の裡に息づいているのである。そして、その国民の信仰心の最も純粋な発露、決して減りず、けっして古びることのない表

象が、神道なのである。」(『神々の国の首都』講談社文庫、1990年、pp.173-4.)

日本人の魂の中に存在する神道の生きた力の解明が、ハーンの本理解の集大成『日本』に集約されたのである。西洋かぶれの知識人たちが恥ずべき不合理な信仰と卑下した神道の本質は、庶民の思考様式や日常生活の美しい道徳感情に息づいていた。お天道様である朝日に向かって、すなわち天照大神に頭を垂れて柏手を打ち虚心に帰って拝む素朴な庶民のおおらかな信仰の姿にハーンは感銘を受けていた。松江時代の『日本警見記』には、「神々の国の首都」、「杵築」、「日本人の微笑」、「日本の庭で」、「家庭の祭祀」などの秀逸な作品が収められている。また熊本時代の『東の国から』には、「石仏」、「柔術」、「勇子」などの佳作を書き、さらに、本理解を伝統文化や神仏混淆の世界に広げた神戸時代では、『心』を完成させ、「日本文化の真髓」、「ハル」、「門つけ」、「趨勢一瞥」、「前世の観念」、「先祖崇拜の思想」などの優れた日本論を書き残している。さらに、随筆や紀行文にも地方の神道思想や風習に関する独自の観察録を記している。

ハーン来日の年の10月30日には教育勅語が出され、神道による聖典として国民教育が規定された。中でも神道は過去に対する感謝や崇拜を教えた。明治維新の国難を乗り越えたものは、日本民族固有の神道の精神的支援であり、その道徳感情であり、国家に対する絶対服従の宗教に他ならなかった。教育勅語は政府批判を封じて、民衆を平定する政治的思惑でなされたもので、神道の天皇崇拜を利用して国家への忠誠を国民に強制するものであった。神道の先祖崇拜が天皇崇拜へ結びつき、教育勅語により国民への統制に利用されるのは、いかにも日本的な非論理性である。しかし、これが成功したのは長い間育成されてきた国民の情緒的な道徳感情によるものであった。この神道的教育の具現である教育勅語によって、日本は国粋主義を高めて日清・日露の大戦に勝利したのであった。ハーンは国家神道が軍国主義に果たす危険な役割を繰り返し警告している。国家神道は様々な多神教であった古神道を天皇崇拜を頂点とするものに再構成した明治政府の政治的産物であった。しかし、本来の神道信仰には西洋を凌駕する高い道徳感情があった。「先祖崇拜の思想」でハーンは次のように断言している。

「神道のもっている道徳的情操のうち、最も高いものは、過去に対する忠実な感謝の念である。この情操に相当するものは、西洋の感情生活のなかにはない。」(『心』岩波文庫、1951年、p.267.)

反面、神道の先祖崇拜を中心とした集団主義や封建制による日本人の没個性は、独創性や個性に欠けた単調な画一性を生みだしたので、科学的論理や市場原理に支配された西洋社会の個人主義的価値観に比べると、民族的劣性を示すものとされてきた。しかし、ハーンは日本人の没個性に独自の創造性や柔軟な生活の知恵を見出して

いた。日本人の没個性や画一性や模倣性の背後には、独自の柔軟な思考力や創造力があり、それは応用力や適応力と呼ぶことのできるものである。したがって、当初、ハーンは没個性や画一性に対して批判的であったが、日本研究を進めるにつれて肯定的な立場を取るようになった。彼の日本批判と賛美の愛憎相反は、表裏一体となって日本の将来に対する期待と懸念とが交錯した矛盾的考察となっている。ハーンは日本を心から愛し、将来の可能性を最大限に信じながら、数多くの希望と失意の果てに辿りついた集大成としての日本論『日本』を完成したのである。ハーンは最後の著書で日本の神道を歴史的眺望において捉え、日本民族の精神や国民性を解明しようとしたのである。

神道の先祖崇拜や仏教の前世の思想は、日本人の没個性を遺伝として伝えられた本能的感覚にした。このような先祖から伝わる本能的感情は、日本の神仏が説く深い道徳感情と結びつき、超個人的なものとなって、集合的意識を呼ぶべきものを生んでいる。

また、日本の美しい自然や伝統文化や神仏混淆の世界を西洋に紹介しながら、同時に彼は日本の古典や民話に取材した再話文学を多数執筆した。日本文化を熱心に西洋に紹介した彼の功績に対して、1915年（大正4年）に日本政府は従四位を贈位した。日本の豊かな自然と伝統文化を心から愛し、彼はその様々な庶民の日常生活の様相を取材し、西洋化によって消えようとしながらも、尚も根強く残っている優れた旧日本の美質を豊かな想像力で描き、その優れた業績で東西比較文化研究の先駆的人物として高く評価されている。東京帝国大学講師の職は1903年（明治36年）まで続き、その後早稲田大学で教鞭を執ったが、1904年（明治37年）9月26日にハーンは不運にも心臓発作により54歳で急逝した。（高瀬彰典）

第12回 平成23年9月16日（金）

会場：島根大学教育学部212研修室

発表題目 漢文学習考―「漢文学基礎講義」の実践を通して―

発表者 竹田 健二

司会者 富安 慎吾

発表概要：平成23年4月より全面実施されている「小学校学習指導要領」には、第5学年及び第6学年の目標及び内容の中に、「伝統的な言語文化に関する事項」として、「親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること」などが新たに加わった。ここで「漢文」とされているものは、小学生が「音読」するものであることから明らかかなように、訓読され書き下し文となったものを指す。

しかし、「漢文」の語が必ず書き下し文を指すわけではない。①所謂「白文」（文言文。古代中国の書き言葉で書かれた文章）、②訓点付き漢文（①を訓読し、訓点を付したもの）、③書き下し文（②の訓点に従って①を漢字仮名交じり文にしたもの）などはいずれも「漢文」と称されることがある。

漢文の訓読によって生み出される「③書き下し文」の文体は、日本語の表現の中の一つの独特なスタイル（漢文訓読調）として成立し、現代日本語の世界にも生きている。だからこそ「国語」として漢文を学ぶ意義がある。またそもそも日本語を書き表す文字として今日我々は漢字を使っており、日本語には漢語が多数含まれている。日本語の世界には漢文が入り込んでいるとあってよい。「漢語」を理解し、適切に使うことができるようになるためにも、漢文学習は必要であると発表者は考える。

もっとも、「訓読」とは何かということは、今日では十分には理解されていない。発表者はこのことを、教育学部の国語専攻・国語副専攻の学生全員に必修となっている授業科目「漢文学基礎講義」の担当を通して痛感している。

訓読は、古代中国の書き言葉で書かれた「①漢文」を、日本語として意味の通る表現に置き換えるもので、一種の翻訳である。そもそも「①漢文」の意味が把握できなければ、訓読することはできない（機械的に訓読することはできない）。もっとも、訓読は翻訳の一種であっても、さまざまな制約があり、不自由で、現代人にはわかりにくい翻訳である。或る漢文を訓読した場合に、その訓読が一通りになるとは限らない。同じ漢文が異なる訓読で読まれることもあれば、異なる漢文の訓読が同じになることもある。

高等学校の「国語総合」において、漢文の入門として「訓読の基礎を学ぶ」ことが目標とされることが多いが、具体的な学習活動としては、①を②にすることはほとんど行われていない。教材として示されている②を、既に付されている訓点に従って③にし、そしてその内容を解釈することが専ら中心となっている。「訓読の基礎」を学ぶというからには、本来①を②にする学習活動が不可欠であり、そうでなければ教材に付されている訓点について学習者に説明することができないと発表者は考える。



そこで、担当する「漢文学基礎講義」の目標として「辞書を活用して、基礎的な漢文を自力で訓読できるようになること」と設定している。

「基礎的な漢文を自力で訓読できるようになる」ことを目指す授業を展開するにあたり、受講者にとって大きな障害となっていると思われるのが、漢字についての理解不足、特に字義の理解が不十分である点である。このことは、現在行われている小学校以降の国語科における漢字学習が、常用漢字表に定められた漢字の字形と読み（音読み・訓読み）の学習に力点を置き、字義の学習をなおざりにしていることに起因すると考えられる。「漢文学基礎講義」の中では、漢和辞書を授業に持参することを義務づけ、辞書を活用できるようになることも併せて指導している。

「漢文学基礎講義」の実践を通して、現在の国語科における漢文学習の問題点を考えるならば、以下の二点が主な問題点であると考えられる。

第一に、漢文学習における訓読の学習の位置付けが明確ではないことである。訓読の学習としては、②訓点付き漢文の解説を中心とした学習だけではなく、①に自分で訓点を付す学習が重要である。そうした学習を進める中で、学習者は漢文訓読調の日本語の表現に通じ、また日本語の中に実に数多く含まれている「漢語」の理解を大いに深めることができるようになるものと期待される。

第二に、漢文学習と漢字学習とが結合していないことである。漢文学習を通して、漢字についての理解（特に字義の理解）を深める学習を積極的にを行い、漢字学習と漢文学習とをより緊密に結合させる必要がある。そもそも国語科教育における漢字学習の枠組みとして、「常用漢字表」（2010年改訂）をそのまま用いることには問題がある。（竹田健二）

第13回 平成24年3月23日（金）

会場：鳥根大学教育学部265研修室

発表題目 言語教育研究と教科内容学—言語文化教育プロジェクトの方向性—

発表者 福田 景道

司会者 福田 哲之

発表概要：鳥根大学教育学部の国語教育と英語教育の専門教員と附属学校（小・中）の国語科・英語科教員による共同研究は、『言語コミュニケーション教育の研究と開発』（鳥根大学教育学部紀要第44巻別冊特集号、2011年）の刊行をもって、第一段階が終結したと考えられる。次の段階として、新たな課題（①新学習指導要領への対応、②教科教育学と教科内容学の連繫、③教育実践力育成方法の探究、④学部教育と大学院教育の連動性の確保）に対処する方途の探究を主軸とする新プロジェクトの実働がもたらされる。これまでの成果を継承しつつ、国語と英語、学部と附属学校の連繫をさらに有効化する必要があると考えられる。

また、プロジェクトとほぼ同一の構成員から成る「鳥根大学言語教育研究会」の研究発表会も今回で13回目となり、日本古典文学史教育、コミュニケーション教育、英語教育、現代文教育、初等中等教育、ローマ字教育、日本語文法教育、英文法教育、書写教育、比較文化教育、漢文教育などに関して、多彩な研究成果が公開されて多角的な観点から討議されてきた。この事実こそが、言語教育という「場」において教科教育学（国語科教育・英語科教育・書道科教育）と教科内容学（日本語学・国文学・漢文学・書写書道・英語学・英文学・比較文化学）の連帯と融合が推進されている証左となると思われる。

〔参考〕鳥根大学言語教育研究会研究発表会の発表者の専門分野と発表内容の分野

専門分野	発表の分野
1 日本古典文学	文学教育
2 英語教育学	言語教育
3 英語学	英語教育
4 日本近代文学	国語教育
5 英語教育学	教育学
6 国語教育学	国語教育
7 日本語学	国語教育
8 英語教育学	英語教育
9 英語学	英語教育
10 書写・書道	書写教育
11 英文学	比較文学
12 漢文学	漢文教育

（福田景道）

第14回 平成24年7月27日（金）

会場：鳥根大学教育学部212研修室

発表題目 国民教材としての魯迅「故郷」を考える

発表者 田中 俊男

司会者 竹田 健二

発表概要：魯迅「故郷」は1950年代に教科書に初登場し、1975年以降は全社の中学国語教科書に採録され続けた定番教材である。作品最後の「希望」をどう捉えるかが最も重要な課題とされてきたが、舞台となる中国社会の理解の難しさから現場の教員にとって扱いやすい教材ではなかった。元生徒たち（鳥根大学学生）がアンケートで、「走れメロス」や「こころ」などの他の定番教材と比較して印象が薄かったと答えていることも、この扱いづらさと連動する問題点であろう。

今回の発表では、「故郷」が日本でどのように教えられてきたかを、資料の使用の是非や「希望」観に焦点を当ててたどった。さらに、中国と過去の日本における魯迅及び「故郷」の意味づけを探る試みを行った。俎上あげたのは魯迅の同時代の文章、1920年代からの中国での指導法、戦時中の日本での魯迅の扱い、50年代の国民文学論争、72年の日中国交回復などである。見えてくるのは、その時々々の社会が魯迅やこの国民教材に特別な期待を背負わせてきたことである。



今われわれは教室の中である解釈を行い、ある指導を行う。それらの行為は、平和教材の授業が典型的だが、こうした期待から独立して成立するものではない。外の世界とわれわれとの関係性は日々更新されている。思考の枠組みに意識的であること、歴史的文脈を俯瞰する視点を持ち続けることが必要だと思われる。

なお、今年度の三省堂版教科書は「故郷」を本編から資料編へと移動させた。これは定番教材の退場を意味する。今後他の教科書が追随するかどうか不明だが、「故郷」が一定の役割を終えたことを示唆しているのかもしれない。

また発表の最後には、室生犀星の詩や魯迅の他作品を組み合わせたオリジナルな授業案を二種類提案した。第一は出郷者と故郷の関係を考える、第二は希望を魯迅に即して考えるという授業である。

発表後の意見交換の場では、現在の日中関係の影響や社会科としての授業方法についての質問が出た。作品の主題を重視する立場から、「故郷」の完成度について欠点を指摘する声もあった。教材の比較という観点からは、小学校定番教材の名前が挙げられ、他方、英語教材の移り変わりやすさを国語の定番教材と対照し、あらためて国語という教科の特殊性に触れる発言もあった。（田中俊男）

第15回 平成25年2月28日（木）

会場：島根大学教育学部265研修室

発表題目 古文教材『竹取物語』の未来—専門教育科目「日本古典文学教材研究」をめぐって—

発表者 福田 景道

司会者 百留 康晴

発表の概要：国語教育コースの専門教育科目「日本古典文学教材研究」は、国文学と国語教育とを融合させるものであり、教科専門教員が教科教育領域に参入する点で今後の教員養成・教師教育にとって軽視できないものと考えられる。

平成24年度のこの授業は、A 中学・高校の日本古典文学教材の実態を精査して教育実践に資することを主目的とし、B 並行して国語科教員に必要な基礎的読解力と表現力を育成することを旨とした。本発表はAを対象とする。この年度は、現行の中学校国語教科書5種すべてに掲載される『竹取物語』を取り上げた。

Aは次のように展開した。①まず古典（古文）学習の意義と意味について問題提起し、それを踏まえつつ、②教材となる古典文学作品（特に『竹取物語』）を鑑賞し、本質・特性・価値などを授業担当者が提示する。こうして古典文学としての『竹取物語』を把握した上で、③受講者全員が中学校国語教科書1種について、教材としての『竹取物語』の実状や各教科書の特性を明らかにし、④さらにその特性を踏まえた発展的教材を試作するという流れである。

このうち、①→②、③→④の繋がりには特に支障はなく、有意義な一面も認められた。一方、②→③には連続性が乏しく、そのために③の達成度は十分なものとはならなかった。高等教育における知見を中等教育の指導に適用できなかったということになる。これによって今年度の授業計画は完遂できなかったと言わなければならない。しかし、完遂はそれほど困難なことであったとは思われない。

なぜなら、対象とした教科書には、絵本などのかぐや姫の物語と古文としての『竹取物語』との共通性によって「古典に親しむ」効果を得て、絵本と古典文学との内容の相違から古典文学の価値に迫るという共通性が見いだせるが、ここに②の知見は適用できるからである。

たとえば、首尾の誕生や昇天場面に顕著な伝奇的性格と中央部分の現実的な難題譚との間に乖離や齟齬を生じさせる「かぐや姫物語」の欠陥が、古典としての『竹取物語』の新解釈によれば解消できるとすれば、それは③④に容易に適用できるであろう。

かぐや姫が五人の貴公子に果たした難題は、いずれも白く光る丸い物体を取りに行くというものと見る近代の研究にはこれを満月に到達することに結びつけて作品全体に統一性と一貫性をもたらすものがある。

絵本などでは単に愚劣な人物でしかない石作の皇子は古典の世界では超人間的な秀歌を詠むことによって婚姻を成立させようとする正統派の王朝びとであったといえれば物語の印象は一変するのではないだろうか。和歌を省略する絵本や昔話ではこのような解釈はあり得ない。かぐや姫が月と地球を往還した旅と貴公子たちが難題に挑んだ旅とは相似形を描くものという理解は、古典『竹取』を近しく新鮮なものに一変させるであろう。

以上に例示した『竹取物語』の解釈は実証された定説ではない。しかし、新しい読み方として③④には活用で



きるものである。ここに教材としての『竹取物語』の未来がある。古典教材は、何十年たっても同じ作品の同じ箇所が採用されていると言われる。しかし、それらの作品にも教材としての新しさは容易に見いだせるのである。解釈や評価の曖昧さや不安定性は、教材化を妨げるだけでなく、教材の新たな活用方法を生み出す材料になり得ると言っても過言ではないであろう。

細部の解釈でも同様のことが指摘できる。教科書5種中2種には、富士山の語源は「土に富む」であると明記されるが、本文にはそのような箇所はない。この解釈の不安定さは学習材料としての欠陥ではあるが、新しい読み方、読みの多様性と見なせば、教材開発の可能性を切り拓くものとなるであろう（なお、このような観点からは、これまで取り上げられることの少ない御伽草子諸作品に教材開発の未来像が展望できるのであるが、ここでは割愛する）。

以上のように、専門的な国文学研究と実践的な国語科教育法とは有効に関連づけられ、「日本古典文学教材研究」存立の根拠ともなるのである。（福田景道）

第16回 平成25年3月27日（水）

会場：島根大学教育学部附属小学校1年1組

発表題目 国語科におけるデジタル教科書の活用

発表者 田中 耕司

司会者 永野 信吾

発表の概要：中央教育審議会答申（「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（答申）（平成20年1月）における「教育内容に関する主な改善内容」）を受け、近年、ICT（Information and Communication Technology）の授業への導入が進められるようになってきている。ICT機器の例としては、コンピュータ、インターネット、スクリーン、プロジェクタ、タブレット、実物投影機、電子黒板、デジタル教科書などを挙げることができ、これらの教室での利用によって、学習の広がりや質の向上が期待されている。しかし、利用の方法や活用の幅などの課題もある。この点について考えるため、今回の研究会では、ICT機器の中で、特に国語科のデジタル教科書

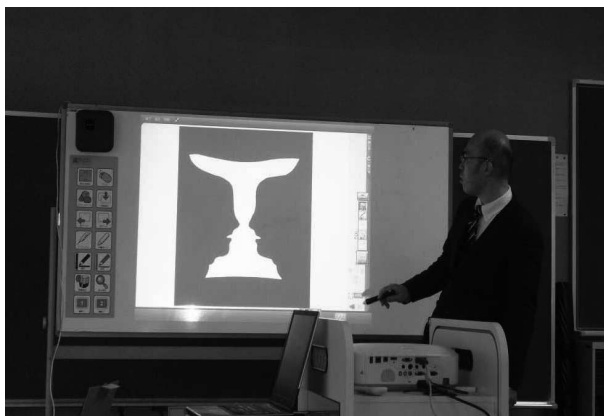


を取り上げ、授業における活用の方法と活用上の課題について検討を行った。

「教育の情報化ビジョン」（文部科学省、2011）によると、「いわゆるデジタル教科書は、「デジタル機器や情報端末向けの教材のうち、既存の教科書の内容と、それを閲覧するためのソフトウェアに加え、編集、移動、追加、削除などの基本機能を備えるもの」であり、主に教員が電子黒板等により子どもたちに提示して指導するためのデジタル教科書（以下「指導者用デジタル教科書」という。）と、主に子どもたちが個々の情報端末で学習するためのデジタル教科書（以下「学習者用デジタル教科書」という。）に大別される」（文部科学省、2011）。この区分に従えば、国語科で主として使用されるデジタル教科書は、教員が電子黒板等により子どもたちに提示して指導するためのものであるといえる。したがって、授業での使用にあたっては、教員は事前にその内容や機能について熟知しておく必要がある。

デジタル教科書の内容や機能には、本文提示機能だけではなく、動画およびアニメーション機能など充実したコンテンツが含まれる。本文提示機能に限って言えば、実物投影機の進歩により、必ずしもデジタル教科書を用いなくとも簡便に拡大提示や保存をすることが可能となっているが、動画については実物投影機での代替が難しい内容もある。たとえば、筆順提示機能については、画面上にはっきりと提示され、スピード調整や一時停止も可能であることから、デジタル教科書ならではの教育効果を期待することができるのではないかと考えられた。

また、本文提示機能を有効に活用する上で、デジタル教科書を使用するハードウェアの特性によって、活用が制限される可能性があることが示された。平成24年3月1日時点での電子黒板自体の導入数は、73,377台となっており（文部科学省、2012）、毎年増加しているが、電子黒板には、プロジェクタの投影方式やディスプレイとの一体型ものがあり、機種によっての特性がある。プロジェクタによる投影方式の場合には、授業までの準備に時間がかかることが活用上の課題として示された。この場合、プロジェクタを教室の天井に設置しておけば、準備時間を短縮させることができるが、小・中学校においては、安全性の観点から日常使用している教室への設置は困難である。また、床側からプロジェクタを投影する場合であっても、国語科では黒板との併用が可能な位置にスクリーンを設置する必要がある。このような条件をクリアし、準備さえ整えられれば、たとえば挿絵の拡大機能を用い、従来拡大印刷機で拡大していた内容を投影によって提示し、かつ黒板も使用しながら授業を行うことができる。機能性と安全性の観点から、理想としては、かつての視聴覚室のように機器やデジタル教科書を一元化して管理する専用の教室を設け、児童生徒が移動しさえすれば授業が開始できる環境を学校内に設けることが、課題の解決へ向けた一つの方法として示された。



さらに、国語科でデジタル教科書を活用する際には、教科書の本文をマーカーでチェックする等、比較的精緻な操作が必要になる。プロジェクタ方式の場合、機種によってはチェックの際のズレやチェックに対しての誤反応などが生じる可能性がでてくることから、ディスプレイとの一体型電子黒板でサイズの大きいものが、国語科の授業を行うにあたっては望ましいと考えられた。しかし、価格上の問題から、導入困難となるケースも多々生じると予想できる。導入にあたっては、行政等の支援を期待したい。また、仮に導入できる場合であっても、日常の教室環境に設置する場合、製品の大きさから落下の危険性もあり、一歩間違えば大事故につながる恐れもある。プロジェクタ方式と同様、設置にあたっては安全に使用できるような環境をまず整備する必要がある。

同時に、各学校でデジタル教科書が授業に導入されたとしても、従来のアナログ媒体を用いた指導方法を軽視してはならないことも指摘することができる。デジタル教科書を用いた授業の組み立てにあたっては、デジタルとアナログ双方の特徴を踏まえることが必要であり、両者の特徴によって使い分ける力が教員の側に今後必要になってくると考えられた。デジタル教科書を活用する場合、このような点について十分に事前検討を行った上で授業に臨まなければ、デジタル教科書は、教師の側にとっては授業を拘束するものとなり、また、児童の側にとっては「わかったつもり」になってしまっ、授業内容について深く考えようとしない姿勢を助長するものとなるであろう。

以上のことから、教員が授業で実際にデジタル教科書を活用する場合、授業のどの部分で、どのように使うか（あるいは児童生徒に使わせるか）を検討しておくことが大切であるといえる。このためには、従来の教材分析、単元構成に加えて、デジタル教科書の内容、機能、そして特徴について熟知している必要があると考えられた。特に、デジタル教科書は、多様な視覚提示機能が含まれるため、これをことばの学びにどのようにつなげるかが国語科における指導上の課題となる。デジタル教科書の使用にあたっては、教員が「見せて終わり」、児童生徒が「眺めて『楽しかった』」授業にならないように留意

する必要があるだろう。見て「わかりやすい」デジタル教科書の導入の結果、ことばであり深く考えない児童生徒を育ててしまっ、本末転倒であるといえる。このような結果を避けるためにも、ことばの学びにつながるようなデジタル教科書の活用法についての研究が今後必要となると考えられた。

〔引用文献〕

文部科学省（2011）. 教育の情報化ビジョン～21世紀にふさわしい学びと学校の創造を目指して～（文部科学省 2011年4月28日）

<http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/04/1305484.htm>（閲覧日2013年3月27日）

文部科学省（2012）. 平成23年度学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果（概要）（平成24年3月現在）（文部科学省 2012年9月）

<http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1323235.htm>（閲覧日2013年3月27日）

（田中耕司）

第17回 平成25年12月20日（金）

会場：島根大学教育学部265研修室

発表題目 体験報告：国立台湾師範大学国語教学中心における中国語学習

発表者 竹田 健二

司会者 田中 俊男

発表の概要：（1）国立台湾師範大学国語教学中心で中国語を学習した経緯

発表者は、2013年の台湾フェローシップに採択され、2013年3月から8月まで、台湾大学哲学系において海外研修を行った。「台湾フェローシップ（台湾奨助金）」とは、中華民国外交部が、海外との相互理解・学術交流を促進し、また海外での台湾研究を広めるために、各国の研究者を台湾に招聘し、調査・研究の機会を提供するものである。この「台湾フェローシップ（台湾奨助金）」に採択された者には、国立台湾師範大学国語教学中心において1学期（3ヶ月）間中国語を学習する機会が無料で与えられる。そこで発表者は、この機会を利用して中国語を学習することとした。

（2）国立台湾師範大学国語教学中心

国立台湾師範大学国語教学中心は、1956年に設立された、外国人学生向けに中国語と中国文化を教授する教育機構である。毎学期（3ヶ月）に約60ヶ国、1600名の学生が学習している。

（3）国語教学中心における授業

国語教学中心における授業は、「普通





班」(Regular Course)と「密集班」(Intensive Course)との2種類とに分かれている。台湾の大学の授業は一般に1コマ50分で、「密集班」は1日連続3コマ、週15時間である。受講生は5～8名、8名が上限である。「普通班」は1日連続2コマの週10時間、但し授業とは別に、大学内において受講生が各自週5時間の補習が義務づけられている。「普通班」の受講生は6～10名である。

授業開始の前、発表者は面接(15分程度)と試験(パソコンを利用。約1時間)を受け、中国語能力の水準が判定された。所属するクラスを決定するためのものである。

発表者が属したのは「密集班」で、受講生は日本人4名、アメリカ人2名、韓国人1名の計7名であった。授業は、3ヶ月の学期の中で教科書『新版实用视听华语4』全14課をすべて終えるというペースで進められた。各授業時間内での活動は、①「生詞」(新出単語)・「文法」の解説、②功課(宿題)の解答・解説、③「生詞」を用いた作文・対話を中心とした。ほぼ毎日のように小テストが行われた他、④スピーチ(5分間)、⑤作文(500字弱)、⑥期末報告(PPTを用いた15分のプレゼンテーション)、⑦期末試験も課せられた。

(5) 感想

国語教学中心の授業は、全体として会話の学習に力点を置くものであった。発表者は自らの聴力及び語彙力の不足を痛感しつつ、結果として中国語の会話能力が向上した手応えを感じた。語学学習において少人数学級が極めて効果的であると感じた。また、およそ授業一般にあてはまることとしてだが、受講生の興味や関心を高めるため、授業者が創意工夫することの大切さをあらためて認識した。(竹田健二)

第18回 平成26年1月31日(金)

会場：島根大学教育学部265研修室

発表題目 英詩と死

発表者 松本 舞

司会者 林 高宣

発表の概要：日本のオペラ歌手、秋川雅史が歌ったことで有名になった「千の風になって」の中で、作者は、自身の死後は、「穏やかな秋雨」「雪上のダイヤモンドのきらめき」そして「千の風になって」愛しい人のそばにいたいのだと、また「墓のなかでは眠らず、私は死

なない」と言う。死後、風や雨になって、いとしい人に会いにゆく、私を風のなかに感じてほしい、という願いは、死にゆくものの叫びとして、英詩の中で描かれてきた。また、人は死んだらどこに行くのか、死んだ人にはどうやったら会えるのか、という探究は常に人類のテーマであり、多くの詩人たちが彼らなりの答えを詩の中にしたためてきた。これらの探求が、死を思い、死者を思い、死後の世界をおもう、という英詩のなかの「エレジー」や「モーニング」(「喪」というジャンルを生み出してきた。本発表ではイギリスにおける葬儀の形式、死と植物、死後の世界などに焦点を当て、英詩における死をみていった。具体的には、イギリスの墓と植物、塵(‘dust’)という概念、死神の描写、天国と地獄の描写、時の翁と死者の書の表現を取り上げ、2013年度に島根大学教育学部で開講した、「文学でたどる英米の歴史」での学生の意見やレポートなどを紹介しながら発表を進めた。ここでは発表の一部を紹介し、発表に対して寄せられた意見などを報告することにしたい。

1. 発表内容 英詩と死— 墓とエレジー、死の定義について

「うた」(‘Song’)と題された詩のなかで、クリスティナ・ロゼッティは、自分の死後、自身を養分にした土から育つ木に思いをはせています。自身の死について嘆かないでくれ、と言いつつも残された人々が、糸杉をみながら、自分のことを思い出してくれることを、暗に願っている。ここでは「糸杉」の木が死後の世界として描かれている。イギリスでは人を棺桶にいれ、土の下に埋めた後、もう一度土をかぶせ、その上には、「糸杉」や「やなぎ」などが植えられる。そのために、「糸杉」は「喪」の象徴、「ヤナギ」は「死」の象徴であるといわれており、多くの詩作品の中で描かれている。

また、英詩のなかでは死を連想させる鳥としてナイチンゲールの描写がある。たとえば、ロマン派の詩人ジョン・キーツは「ナイチンゲールに寄せて」(‘Ode to a Nightingale’)と題された詩の中で、ナイチンゲールを「死ぬことはない 不滅の鳥」とたとえ、安らかに死んで生きたいという夢を語っている。死の不思議な魅力の前に、ナイチンゲールの声は谷間の底へと沈み去っていく。キーツは、ナイチンゲールの鳴き声を一種の鎮魂歌(レクイエム)にとらえ、土へと帰ってゆく自分自身に思いをはせる。また、死には「恍惚」(エクスタシー)が伴うことが、ナイチンゲールの甲高い声に潜んでいる。この詩のなかで、キーツは暗闇にひそむナイチンゲールを離れたいちから聞いていたものの、やがて自身の死によって、ナイチンゲールの鳴き声と一体化していく。

死後の魂のゆくえは、海と船のイメージで描写される。アルフレッド・テニソンは「砂州をこえて」(‘Crossing the Bar’)の中で、死者の魂を運ぶカロン(舟)の姿や、三途の河のイメージを描きながら、死後の世界へと旅立つ姿を描く。また、「死」そのものを一種の船の旅とし

て描く詩人たちもいた。死というおおきな海原に旅立つことで、この世の記憶をなくしてしまうと、D.H.ローレンスは「死の舟」(‘Ship of Death’)の中で言っている。学生の意見では、「死が死ぬ。」というローレンスの表現は、「現世での死の後に経験する、二度目の死ではないかと考えられる。一度目の死の段階ではまだ魂は人間の体に宿っており、死の世界に向うとき、すなわち海を渡るときに魂が人間の体から離れることが二度目の死である。この二度目の死を経験する際には、人間の体に死の海の波が打ち寄せている。この波は死体の傷を癒す働きを持っている。そして波が引くことにあわせて、魂が海へ旅に出て死の世界に向うのである。」というものがあつた。

イギリスでは自殺した者の魂は、地獄へと落ちるために、自殺者以外の墓とは異なる場所に埋葬することが教会によって命じられていた。聖書のなかでの初めての自殺者は、キリストを裏切ったユダで、ユダが自殺した際に投げ入れられた金貨に抱いて買われた土地は、「ポッターズ・フィールド」もしくは血の畑と呼ばれており、これが自殺者の墓とされている。戯曲『ハムレット』のなかでは、土葬の文化や、墓堀りによって提示される、「メメント・モリ」という概念が描かれている。

17世紀以前の詩人たちは、死神によって命がかられるものとして死を定義している。ジョン・ダンが「死よ、おごるなかれ」(‘Death, be no tproud’)と題された詩のなかで、死神による死というものは仮の姿であり、最後の審判によって、善き魂がやがては復活することを描いている。また、死神によるものの他に、眠りにつくこと、もしくは「魂」と「肉体」が解剖されることとして、死が定義されることもあり、研究会ではそれらが描かれている文学作品の例について提示し、学生の意見を紹介した。

2. 発表に寄せられたコメントとそれに対する見解

会場からは、中学校や高校での英語教育の現場において、死という概念や詩をはじめとする文学作品が取り上げられることが多いかという質問が投げかけられた。英語教科書では、各学年において指導する文法事項や単語が定められているため、文学作品が取り上げられることが少なく、その結果として死というジャンルが扱われる

ことが少ない。しかしながら、英語圏における国語教育においては、シェイクスピアの戯曲の実演の試みや、詩を暗唱する授業が行われている。国際化が進む現代において、日本の英語教育のなかで文学作品を取りあげ、その背景や詩特有の表現を学習することは、英語で真のコミュニケーション能力を高めることが期待される。(松本舞)

第19回 平成26年8月29日(金)

会場：島根大学教育学部265研修室

テーマ：

専攻共通科目としての言語コミュニケーション論
発表題目と発表者

- 1 専攻共通科目としての「日本語表現論」
百留 康晴
- 2 専攻共通科目としての「異文化の交流と理解」
大谷みどり
- 3 専攻共通科目としての「日英対照言語学」
縄田 裕幸

発表の概要：

1 専攻共通科目としての「日本語表現論」

百留 康晴

本発表では言語コミュニケーション論を構成する、専攻共通科目としての「日本語表現論」の概要、学生に対する効果、見えてきた課題、授業改善の方向に関して発表を行った。

母語話者である日本人にとっての日本語は当たり前存在であり、通常分析対象とはあまりならない。この授業では日本語表現に関する種々のテーマを取り上げ、あえて日本語への内省力を培うことを目的としている。主に日本語における文法やコミュニケーション上のストラテジーに関係する諸問題を通して形式の異なりによる表現上の違いやよりよいあり方を論じていく。

森山卓郎(2002)『表現を味わうための日本語文法』岩波書店、森山卓郎(2003)『コミュニケーション力をみがく 日本語表現の戦略』日本放送出版協会をテキストとし、その内容を噛み砕いて説明している。ここ3年間は最後に日本語関係の新書を1冊選び、書評を書くという課題を課すことで文章の批判的な読みや自分の考えを論理的に表現する力を養うことを行っている。

この授業では身近な言語表現の他、歌詞(竹内まりや「駅」、やなせたかし「勇気りんりん」、松任谷由美「恋人がサンタクロース」、「ロンドン橋」の歌)、詩(高村光太郎「冬が来た」「ぼろぼろな駝鳥」、阪田寛夫「練習問題」、中原中也「一つのメルヘン」、谷川俊太郎「かなしみ」)、俳句(種田山頭火「生き残った虫のひとつは火をめぐる」)などに含まれる多くの日本語表現が取り上げられているため、国語科の教材研究を行う際にも参考





になる内容が含まれているのではないかと考える。

各授業時に行っているアンケート用紙の内容から見ると、身近な日本語に潜む文法の存在への気づき、日本語を注意して観察してみようとする意欲を喚起することに一定程度効果があるように思う。またアンケートで寄せられた質問をもとにさらに補足説明を行うことで授業内容や日本語に関する理解を深められるようにしている。

提出されたレポート内容からは40字×40行という書式が守れない、新書の批評という課題であるにも関わらず、タイトル、本文に書名が一切出てこない、取り上げた新書の著者名を他の新書の著者名と混同する、その内容についてではなく、新書を読んで考えたことを中心に述べている、など指示した基本的なことが出来ていない学生が、ごく一部ではあるもののいるということが見えてきた。

今後の授業改善の方向として、レポート作成指導を強化していくことを考えている。具体的にはレポート課題の提出締切を冬休み明け第1回目の授業時に設定し、一月中に添削したレポートを返却しつつ、作文指導を展開する。批評を行う対象書籍を5～10冊に絞るなど、学生の提出したレポート内容を評価するための比較検討や授業で使用する際の教材化をより容易にする方策を探りたいと考えている。(百留康晴)

2 専攻共通科目としての「異文化の交流と理解」

大谷みどり

■授業のねらい

本科目は筆者が担当して、まだ4年目であるが、言語とは切り離すことのできない「文化」と、「言語」と「文化」の関連について、学生が基本的な概念や要素を学ぶことを目標としている。前半では文化の概念と構成要素を大きな視点から捉え、後半では言語と文化の関連を様々な角度から考えると共に、他の文化と比較しながら自文化についても再考する。また、留学生との合同授業も一部実施し、実体験としての異文化交流と理解を考える機会としている。具体的達成目標としては：(a) 専攻する言語に対する言語観や、その背景にある文化に関して基本的な知識を身につける：(b) 教員として十分な言語運用能力の基礎を身につける：(c) 自分の専門

領域について追及すべき課題を見つけ、資料収集を含め探究・調査をする基礎を身につける、の3点を挙げている。

■授業の内容

具体的な科目構成の前半、文化の概念と構成要素を学ぶ際、4人ずつのグループに分け、留学生を対象にしての7～10分の日本文化紹介も課している。これまで学生が取り上げたトピックとしては、日本の食・行事・スポーツをはじめ、水墨画や書道・会話等に見られる日本人の「間」の捉え方、Cool Japan等、伝統的な物から新しい事象まで、若い世代の捉え方も反映しながら留学生にプレゼンを行っている。日本人学生も留学生も、各プレゼンを聞いてコメントや質問を書き、発表した各グループに他のグループからのコメントはすべて返すと共に、留学生からの質問にも答えるようにしている。

さらに昨年度からは、留学生と4人グループを作り、共通のテーマで話し合う機会を設けている。昨年度は「母国の教育システム」をテーマとし、留学生は出身国の教育について作文を書き、全員の作文を綴じた物をコピーしてディスカッションの前週に学生に渡した。特に同じグループでディスカッションを行う留学生の作文に目を通すように指示をし、感想と質問を準備させて当日を迎えるようにしている。留学生とのディスカッションは1コマ分をとっているが、各グループでファシリテーター・書記・発表者を決め、ディスカッションを30分行った後、各グループから話し合いの内容についての発表を求めている。また発表に関する質疑応答の時間も含めると、90分では少し時間が不足するくらいである。

このような実践的な内容を含めた前半に続き、言語と文化の関連に焦点を当てる後半では、コミュニケーションを軸とし、会話の成り立ち、日本語と英語のコミュニケーションスタイルの相違、言葉の含み、文化とメタファー、言葉と性別、最後に非言語コミュニケーション等を含めている。

学期最後のアンケートには、留学生とのディスカッションについての記述が多く、「大学4年間で初めて留学生さんと話しをする貴重な機会を得ることが出来た(4回生)」「留学生さんから直接話を聞くことが出来、中国と



日本の学校の違いを学ぶことが出来た」「外国語として日本語を学ぶ苦勞などを知ることが出来た」「是非また、このような機会を作って欲しい」「授業で別のテーマで、もう一度プレゼンやディスカッションをしたい」などのコメントが複数見られた。学生達は、総論的に言語と文化の関連を学ぶと共に、留学生との交流を通し、異文化の交流と理解という点からは貴重な体験を積んでいるように思える。今後の課題の一つとして、1回生の授業であるため学生がまだ不慣れな、プレゼンの仕方や引用の仕方、ディスカッションの進め方等について、どの程度まで本授業で説明をする必要があるかという点がある。しかしながら留学生とのプレゼンやディスカッション自身は続けていきたい。(大谷みどり)

3 専攻共通科目としての「日英対照言語学」

縄田 裕幸

■授業のねらい

本科目「日英対照言語学」は、高等学校までは別の教科として教えられてきた日本語と英語を「言語学」という共通の基盤にのせて考察することによって、われわれの母語である日本語と最もなじみのある外国語である英語をより深く理解するための視点を獲得することをねらいとしている。具体的には、(i) 言語学の基礎的な知識を習得する(知識)とともに(ii) 普段無意識に使っている言葉を意識的に分析するメタ言語意識を活性化させ(技能)、それによって(iii) 文法ないし文法学習に対する否定的なイメージを払拭する(態度)ことを目指している。このような知識・技能・態度によって養われる「健全な言語観」は国語教員・英語教員を目指す学生にとって必要不可欠であるばかりでなく、私たちの言語生活を豊かにし社会生活において役に立つ教養としての側面も持っている。

■授業の内容

試験を除く15回の内容は、小さな言語単位から大きな言語単位へと順に配列されている。すなわち、音声学・音韻論の内容から始まり、語形成や文構造を経て談話構造や語用論へといたる構成となっている。このような授業構成によって、小さな構成要素が組み合わせられて徐々に大きな構造が作られていく階層性が人間言語の大きな特徴であること、音節・語・文・談話などのレベルごとにさまざまな種類の制約が働いていること、さらにそれぞれのレベルで日本語と英語の「距離」が異なる—例えば音のリズムやアクセントは大きく異なるが複合語の構造には共通点が多い—と考えている。

授業で取り上げる言語現象の選択にあたっては、なるべく身近な言語現象を取り上げ、そこに潜む法則性に気づかせる方針をとっている。例えば、カレーコロッケはコロッケの一種であるが、コロッケカレーはカレーの一種である。これは形態論において複合語の意味の中心は



常に右側の要素になるという「右側主要部の原則」によって説明される現象である。この原則は日本語と英語で共通してはたらいっており、しかも非常に一般性が高い。このような原則を受講生自身が日常的に使っている言葉に当てはめて確認することによって、あるいは原則をみずから発見することによって、言葉を意識的に分析する知的な楽しさに気づいてくれることを期待している。

また、特に英語の言語現象に関しては、中学校や高等学校で学習した文法知識を「なぜ」の視点で問い直すことも心がけている。例えば、「テーブルの上に本があります」を英語で表現すると、「本」が不定名詞であれば存在構文を用いてThere is a book on table.となるが、「本」が定名詞であればこれを主語にしたThe book is on the table.が好まれる。この対比は、文レベルの情報配列に関する原則「旧情報はなるべく文の前方へ、新情報はなるべく文の後方へ配置せよ」によって説明される。このような文の使い分けは多くの学習者が疑問に感じることであり、教員を目指す受講生にはぜひ知っておいていただきたい事項のひとつである。英語教員がこのような知識を持つことによって暗記中心の文法指導から脱却し、ことばの面白さを伝える授業が増えていくことを期待したい。(縄田裕幸)

